

## 第3期第11回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

〔日 時〕2017年5月25日（木）10:00～12:00

〔場 所〕生涯学習センター 学習室2

〔出席者〕※敬称略

委員：太田 まゆみ、大野 浩子、上村 まり、白崎 好邦、島田 忠次、陶山 慎治  
中里 静江、中村 香、前田 美幸、柳沼 恵一  
以上 10名

事務局：板橋センター長、加藤担当課長、小林管理係長、松田事業係長、齊藤主任（記録）

〔欠席者〕岩本 陽児 辰巳 厚子 以上2名

〔傍聴人〕2人

〔資 料〕

- ・市民の生涯学習支援及び生涯学習センターの目指すべき姿に関する答申等（資料1）
- ・次期教育プラン・次期生涯学習推進計画の検討について（当日資料）
- ・2017年度 公共施設再編計画策定に向けたスケジュール（案）
- ・生涯学習施設の実態・課題（当日資料）
- ・生涯学習施設の今後の方向性（当日資料）
- ・施設機能毎の今後の方向性案（まとめ）
- ・2016年度生涯学習センター事業 事業評価最終報告（No.8～9、No.11、No.14）
- ・平成29年度東京都家庭教育支援基盤形成事業実施要綱及び補助金の申請調査票（当日資料）
- ・2017年度 まちチャレ選考結果（当日資料）

会長挨拶：資料1の答申等を踏まえ、それぞれ生涯学習センターについてイメージをお持ちだと思いの  
で、今回は一定のコンセンサスを得たい。冒頭センター長の方から報告事項がある。

### ○センター長報告事項

#### 1. まちチャレの選考結果について

- ・5月13日（土）に応募者11団体のプレゼンテーションとヒアリングが1日ばかりで行なわれた。
- ・運営協議会委員より選出された5人の選考委員の方々と職員で十分に話し合った結果、資料「2017年度 まちチャレ選考結果」のとおり、5団体を選考した。
- ・昨年度からの課題であった、「市民から見ると選考基準がわかりにくい」「職員だけによる選考で、透明性の確保が不十分」という点について見直しが出来た。なお、今回の選考にあたっては、「センター事業の地域展開」や「地域課題の解決」を重視している。
- ・選考委員会については、運営協議会の部会という位置づけに準じるものとし、謝礼もそれに従ってお支払いいたしたい。
- ・今後、5つの団体について職員の担当を決め、内容を含めこれから調整を行う。「まちチャレ」の今後の企画や進行状況については、随時報告いたしたい。全ての企画が決まった段階で、予算に余裕があれば、次点も検討したい。
- ・落選団体からの問い合わせに対しては、「センター事業の地域での展開」や、「地域課題の解決」を選考において重視した点をお伝えし、次回の参考にさせていただいた。

#### 2. 公共施設の再編計画の策定に関する情報提供について。

- ・具体的なスケジュールとしては、短期再編プログラムを今年度に検討していく。これは最初の9年間の計画で、2018～2026年度全体では2055年度までと長期の計画である。
- ・6月の24日から7月9日まで上半期に市民説明会を10回以上と、同時期に市民意見の募集並びに無作為抽出による市民アンケートを実施予定である。下半期に再度市民説明会と市民意見を募集

して、年度末に向けて計画を作成する。

- ・「生涯学習センター」については生涯学習施設が市内に1館であり、中心市街地にあり利用しやすいので残る予定だが、中心市街地の他施設が無くなる予定なので、残る施設に会議室等の機能を移すことを検討する。
- ・「生涯学習センターは・・・学習活動に限定しない施設として再編を検討する」という文言について、現在既に学習活動だけではなく、地域の団体の利用も認めているところなので、集会機能としての役割が拡大されると捉えているが、表現を見直したいと考えている。
- ・市民大学の見直しと合わせて陶芸講座の終了について検討する。
- ・「生涯学習施設の実態・課題」と書かれた資料については再編後のイメージが載っているので参照されたい。

#### ○質問

委員：地域課題の解決のための会議は学習利用として見なされないのか。できれば学習という捉え方を広くとらえ、生きること、生活する事にとって学習は必要であるというように価値観を変えていってもらいたい。

事務局：集会と学習を分けて考えられている文言となっているが、生涯学習センターとしては、全て学習と捉えられると考えている。他の「貸し部屋」というところで利用している団体と区別することにも違和感を持っている。一方、市民ホールや文化交流センターでは物販も兼ねた活動も可能だが、それ以外の施設では事業活動そのものは禁じている。この点については、表現を検討していきたい。

#### ○配布資料について、事務局からの説明

##### 1. 市民の生涯学習支援及び生涯学習センターの目指すべき姿に関する答申等（資料1）について

- ・資料1は、前回の議論の中で、大きな方向性は国乃至は審議会で決まっているのではないかと、センターとして何をやっていくべきかということ議論すべきではないか、という結論で前回終わったが、改めてここを整理するために、前回お配りした資料を時系列に直し、加えて国の答申についても入れたものである。また、第1回運営協議会でお配りした「2016年3月 生涯学習審議会答申」については改めてお読みいただきたいご連絡をした。

##### 2. 次期教育プラン・次期生涯学習推進計画の検討について（当日資料）

- ・今回作っていく計画は二つあり、骨組としての次期「教育プラン」と実行計画としての「生涯学習推進計画」である。「教育プラン」については、運営協議会から岩本委員を選出し、センター長も出席されているので、骨組の議論がどう進んでいるかの情報提供を受けながら、それに基づいて何をやっていくかを同時並行的に議論していきたい。
- ・2016年3月の答申では「地域と学校をどうつないでいくか」という議論が進められていることを受けて、次の教育プランにおいても学校教育の部分については学校教育部で検討し、生涯学習については生涯学習部で検討するのは今までも同じだが、今後はその間にある「地域と学校」についてもそれぞれの部から委員を出して検討を進めていく。ここが前回の教育プラン・推進計画とは大きく違う部分となってくる。
- ・行政改革との絡みで、施設再編、とりわけ集会機能や学習機能についても大きく変わっていくところである。
- ・皆様には、今までの答申等を踏まえた上で、生涯学習センターとして、どこに重点を置き、目指すべき姿として一番やらなくてはいけないことや、残すべきことは何かを検討していただきたい。

会長：ではこれより、配布した資料と、特に第1回で配布した資料No.9の2016年の審議会の答申を読んで、委員の皆様にお考えいただいたご意見について順番にお伺いしたい。

#### ○各委員の方々の意見

委員：この配布資料で分かる通り、地方行政の枠組みで考える必要がある。生涯学習審議会が骨でこ

こが肉であるとしたならば、血を通わせるためには、どういことを残していったらいいか。社会教育に関する講座が本当にここでできるのかどうか。最初のセンター長報告にあった新しくなった「まちチャレ」のように、地域にも出て行って活動をするというのはこれからの生涯学習センターのあり方として良いことである。もともと公民館は地域に根差した施設として中学校区に1館ということで考えられたが、このような大きな都市に1館しかない。増やすことは難しく、1館しかないところでやれることは何か。

・生涯学習を推進するうえで地域の人として学校とどうかかわっていけるかを考える必要があるが、社会が充実することで学校が良くなっていくような発想の転換をしないと、学校がますます忙しくなるという状況になりかねない。つまり、学校の施設を使っても学校の子どもは外に出していくというような発想にしていった方がまちづくりになる。鶴川第二小学校の大人の学び、この「7年1組」とはとても面白い発想だと思う。地域があるからこそ、学校が良くなっていくような、学校の為のみならず地域が良くなるためにはどうすればいいのかを考えることによって、学校が良くなっていく。意味のあるものにするためにここでできることは何なのかを考えていく必要がある。

会長：学校と地域と社会教育の考えにおいて、学校が中心の考え方があったかもしれないが、よくよく考えると学校自体が独立して存在するわけではない。社会の中で位置づけられるというアプローチが示された。町田一中のグラウンドの前の横断幕に「地域と共に歩み明日の地域を担う学校」という標語が掲げられている。地域と共に歩むという考え方が自然にこれからの学校のあり方になってきているのだろうか、先生のお考えに通じるものがある。

委員：まず生涯学習の期待感、目的について考えてみた。基本的には資料の方向性が良いが、地域展開等については答申等では一部実現されていないという表現もあるので、踏襲すべき。ただ、今までの延長線だけでは物足りない。その時々々の社会情勢を反映しながら今後の日本がどうなっていくかを考えなければならない。

・大きな問題として2025年問題が意識されている。団塊の世代が75歳以上のウエイトが25パーセント以上になり、いまだかつてないような超高齢化社会になる。75歳前後は寝たきり生活の分岐点でもある。超高齢化社会を迎えるにあたって、介護や医療についてどう備えるかという問題。

・「一億総活躍社会」に書かれているのは、国民に自立や自己責任を求めるもので、これ以上の社会保障や福祉は期待できないので、知識を得るなり、対策を練るなり、地域が頑張ってください、今後の社会に備えて下さい、ということだ。65歳以上の方は、6割近くが現に働きたいと思っている。生涯現役、死ぬまで働いて、自立・自己責任を求め、救済から自立支援へ向かう。国はこれ以上のことはできないので自立が極めて重要になりますよ、と言っている風に思えて仕方がない。

・今までの生涯学習の目的は踏襲すべきだろうと思うが、生涯学習の課題とは時代の変化に応じて課題が変わってくるものだからそれを理解し、それにどう対応していくかを考えることが非常に重要な役割・目的だと思う。

委員：今委員が発言された内容は新自由主義の時代に学びのセーフティーネットとしてどこまで教育行政として残していくか、何を残していくか、というところが重要となっていくということである。自己責任にするのではなく、新自由主義が加速化していく中で行政として何を残していかなければならないかが問題意識として重要である。変化をどう受け止め生涯学習を通じてどう自分として備えていくかということが大事だ。

会長：社会変化を踏まえて、生涯現役で過ごせるようになることが求められるということか。

委員：生涯現役を肯定しているということではなく、今までの国のサービスが期待できない中で地域で補っていくことが大事になるということである。

会長：アプローチとして2つ挙げられていますね（事前提出意見を元に）。

委員：時代の状況変化をあらかじめ予見して、どういう課題が出てきて、生涯学習の場ではどんな学びを取り入れ、地域住民にどのような事や発想方法を学んでもらうかが重要だということである。大学や、市町村では名古屋市や広島市でも「eラーニング」を取り入れているという情報もある。

生涯学習センターは1つだが、それにこだわることなく、インターネットを通じて学習の場を提供するということもできる。

・時事問題や人間関係づくりの場を提供し、地域コミュニティの講座講演会のみならず、つながりの場として提供していくことが大切である。

・「時事問題」というのは2025年問題などを生涯学習としても取り上げるべきということ。政治経済や国際政治学はあるが、国内の問題をじっくりと取り上げているような講座が少ない。憲法問題も国民的課題になりつつある。憲法をどう変えようとしているのか。民間カルチャーセンターはいくらでも自由に取り上げていくことはできるが、生涯学習センターでも、全くノータッチというよりは最低限のことを学ぶ場を提供するということが大事だ。もちろん中立的立場はよくわかっているのだが。

センター長：昨年度までは法学の講座で憲法を取り上げており、考える場としては大事だが、色々な立場があり、一つの立場に偏ることの無いような講座づくりがなかなか難しい。

会 長：取り上げ方は慎重にならざるを得ず、頻度的には少なくなってしまう。

委 員：生涯学習センターの役割について考えるに、お金が無くなっているという中でも利用やニーズがあるスポーツなどには費用が行くだろうことから、人がたくさん集まり活発に活動しているとなれば無視できなくなるというところでは、利用を伸ばすということが大切になっていくと思う。

・生涯学習センターで学ぶ人には、男女平等推進センターに行ってもことばらんどに行っても会う。子育て広場を利用する母親達のように、ぐるぐる回っているばかりで広がりが無い。同じような人ばかり利用しているが、もっと地域づくりに集約できるような役割があるのではないか。ここで学んだ人は社会課題に気づいていて充分学んでいるので、その人たちのスキルアップも大事だが、その人たちが現実に学びを活かして社会で実現できるようなものにしてもらえればと思う。

・まちチャレに応募した団体の中にはうちの団体の人がいるが、現実にその子が小学生のための講座でためき山のことがわかりうちのスタッフになったのだが、そういうチャンスとそういう場が大事。学んで勉強できた、で終わらずに、その後の後押しをしてあげられるような、活躍の場を与えられるような仕組みがあると良い。私たちも社会実現のために自分達が見つけた課題の為に冒険あそび場をやっている。目指すべきものは一緒。たまたま手段が冒険あそび場ということだけである。

・どこも同じような講座だったり活動だったり、同じような人が同じような事をそれぞれのところでやっているという感じがなにしもあらずだが、一旦活動に関わると、それぞれの活動において、男女平等フェスティバルにも出なくてはいけない、役員もやらなくてはならない、子連れには負担である。

委 員：シルバー人材センターとか商工会議所とかいろいろところで連携したプログラムを練っている。生涯学習センターも他の団体と連携をしたほうが良い。町田の男性が社会で輝いているという社会があるべき姿という考えで、全体を通じて思うところで、新自由主義ということもおっしゃっていたが、町田市民の幸せについて立ち止まって考えてみたい。幸せの定義を市民みんなで考えることは難しいと思うが、私自身が高齢者の看取りといったような仕事をやらせてもらっていて、介護券使い放題、薬飲み放題がいい人生だったなんて思っている人は誰一人いないわけである。社会保障がどんどん削られていく中でそこに価値観を置いているとどんどん不幸になっていく。「人生『長さ』ではなくて『クオリティ』だよね」ということをもう一回みんな考えてみて、色々なところで色々な幸せがちりばめられているとは思いますが、私個人としては「地域とつながっていたから幸せだった」、「地域の中で役割があったから幸せだった」、そのために「地域とつながる方法」や「地域の中で役割を得る方法」を学ぶ機会があったから幸せだった、という方向性を考えていくといいのではないかと思う。生涯学習センターは何を町田市民と学び合うかという事を考えてみたときにそこがポイントではないか考える。「色々なプログラムに参加して地域とつながることが出来た」ということとか「私にも役割が出来た」ということが、町田市民の幸せの定義みたいなものに近づいていくといい。

委員：最近現場に色々な方が来る。放課後デイサービスの利用者の方で難病を抱えた子、障がいのある方、シニアやその中でもシングルシニアの、地域でコミュニティ難民になっている人、それも男性が来る。ボランティアのような負担の大きなことは出来ないが、何かすることで、存在意義を確認したいと感じている。そのような思いを持ち寄って、活躍できる場のようなものが生涯学習センターで出来たらいいと思う。

委員：商工会議所の人と話をしている中で、小田急線の有名な企業で働いていた人が定年退職したら、町田の中小企業でちょっとアルバイトして欲しいという話が出た。商工会議所としては、素晴らしい人材には非常勤でいいからちょっと手伝って欲しい。男性はボランティアとお金をもらうということ二つやっていることが必要なのだと思う。今日はお金をもらえる日、今日は社会的活動をする日というバランスが、男性が地域とつながるいいバランスとなる。

委員：NPOがやっている、二枚目の名詞というのがある。企業の名詞と二枚目の地域での名刺。

委員：そのためにも連携すると良い。

会長：障がい者も高齢者も含めて、誰もが地域とつながり、そこで役割を学び、提供できるようになると良い。

委員：生涯学習センターの目指すべき役割として4つ述べたい。①地域とセンターが結びついている。市民に愛され、相談される。知られているセンターであって欲しい。②地域課題解決活動を養成できる人を養成する。③学習のコンシェルジュ、地域と人を結ぶ。④関係機関と連携。

・行政の足りない部分を地域で補うという話があったが、自分などは、人に頼るよりむしろ、まずは自分で、それを完成させるために行政に助けてもらうところは助けてもらうという姿勢でやってきた。地域で補うことでどういうことが地域でできるかということ、一つはセンター（行政）としては地域に出ていくことだと思う。「まちチャレ」的な地域に出ていくことがそれであるし、機会あるごとにセンターが「あなたにとって役に立つ楽しいところである」ということを声かけする事が大切。何か地域をまとめ、問題解決する為には、問題意識を持つ人を育てることが必要。問題意識を持つ人は、シニアか成人か学生か子どもなのか、誰を対象にするかということはあるが、問題意識を持った人をどうやって地域に送り出すかということ。問題意識を持つ人たちをどうまとめていくかということが達成されないと地域で補うことができない。陶山委員のような方がいれば良いが、地域だけで出来ない問題について、どういう支援をするのかが今求められているところであり、生涯学習センターの目指すべきところだと考える。

会長：地域とつながり、そのために人を養成し、その人がコンシェルジュの一員として活躍の場を提供していくにはどうするかということである。学校との関係について、ボランティアコーディネーターの立場としてご意見をいただきたい。

委員：ボランティアコーディネーターの役割は、学校と地域を結ぶことだが、我々の活動と生涯学習センターの活動が繋がらない。一つ一つの講座をみると、生涯学習センターの豊富な人脈を活かし、世の中にたくさんいる素晴らしい講師のもとで、人々が学んでいる。一方の現場の小学校・中学校と生涯学習センターの間には大きな川が流れていて、生涯学習センターの人材が小学校に係わることもないし、小学校の生徒が生涯学習センターに係わるということにおいても、現実的につながるのイメージを持てなかったが、資料の図を見てどこに位置するのかがわかった。この存在を知っていて、カルチャーセンターに比べて格安で内容の深いものをやっているということを知っている一部の市民だけが、恩恵を受けている。ほとんどの人は存在を知らない。もちろん周知はされていると思うが、参加する自分がイメージ出来ないのだろうと思う。町内会や地域との係わりの中で、地域の中で活躍されている人達に伺うと、生涯学習センターに行ったことはないと言う。全10回講座は、敷居が高いようだ。現在困っていることを解決できるような内容をやるとよいのでは。内容の高い国際政治とかは、生涯学習センターで行い、健康寿命を延ばすための講座等は小学校などで行うと、近隣の高齢者が隣近所を誘い合ってくることができる。不審者情報が多い地域や交通事故が発生しやすい地域等でどういう活動ができるかということ地域で考える。地域に密着した形で予算が使えたら。事務力、人材が地域で育っていくと良いのではないかと思う。地域の人が困っているような役に立つテーマに手助けになるようなものであ

れば敷居が低くなって人々足を運ぶようになるのではないか。

尊敬する本校の前校長先生がおっしゃっていたことには、「小学校（中学校）は周りを湖に囲まれた陸の孤島のようなものだ。地域に中心的にあって子ども達がいて大事なのは地域にも解っているけれども陸の孤島にあって、地域から見ると知らない子がやったちょっとしたことがカンに触る、一回来てもらったり、子ども達が地域の保育園に行ったり細かった一本橋がどんどん太くなる。知っている子どもであれば、地域の人も温かい目で子ども達の成長を助けようとして、犬の散歩をなるべく夕方や朝の時間にやってくれるようになり、ちょっとずつ、いろんなことが回り出して地域で学校づくりが行われる。教員はいずれ異動するから子ども達を最後まで暖かく見守り育てていくのは地域である。この子達がいずれ、それこそ2025年になった時に社会を支えるのは結局この子達である。この子達にいろいろな教育活動をしているが、この子達の20年後半分以上今はない職業に就くと言われている。いろいろな事を体験していろいろな局面でいろいろな問題を解決する力を身につけるのが大事である。その力を地域で身につけることができる」とよい。

委員：国分寺市では、公運審（公民館運営審議会＝運営協議会と同様の会議）が地域や自治会で子どものための交通教室を行う取組みを仕掛けた。地域と公民館を結びつける取組みの1つの例として情報提供したい。

委員：市民協働との連携はあるのか。地域の課題は自治会連合会や社会福祉協議会等、いろいろなところで行っているがバラつきがあるので、講師もノウハウも持つ生涯学習センターとして吸い上げて提供するということが可能なのでは。

事務局：連携という点では、鶴川の地区協議会、3月に市民協働推進課の地域デビュー講座を共催で行った。市民協働推進課は団体同士をつなぐという作業をする。ここ生涯学習センターは団体を育て、サークル化を促していく。既に団体があるわけではないので、団体になるまでは生涯学習センター、団体になってからは市民協働ということで連携を図っていかなくてはいけない。予算も人員も減り、町田に1館しかなく地域に出ていこうとした中で、情報は市民協働推進課の方が、地縁団体、NPOの情報を持っているので、いかに連携をとっていかかが、重要になっていく。

委員：改めて答申を読み直して勉強したが、ここには手だてもしっかり書かれてある。まずこれを最初にやるべきだったのかなと思う。既にここに書いてあり、まだ去年ということだが、具体的に言えばもっとこうなのかなというのはあるが、情報発信は確かに必要だが、隣はなにをやっているのか全然わからないのが役所なので、お金が無ければ他課や市民団体と、協力してやっていく等、市民の為を考えて枠にとらわれずやって欲しい。情報の集約、他市との情報交換、他課との協力の話がでて、良いことだと思う。団体がいっぱいありすぎるので団体間の情報もセンターで集約できると良い。答申の「6つの考え方」は良くできており、改めて読むとこの通りだと思う。答申は、本当は運協が踏まなくてはいけないだろう。

・「地域」とのつながりについて。退職した後の居心地が良い場所や、経験ある人たちを上手く活用し、自分の経験や知識を次世代の子ども達に教えていくことが出来る場所を地域に作りたい。これは、将来の子ども達を育てることにつながり、将来の自分達にかえってくることでもある。それを全て生涯学習センターでやるのは難しいので、地区協議会（地区協議会は市民協働推進課が管轄していると初めて知ったが）や、市民協働推進課とも一緒に協力して情報を共有していくと良い。私の活動団体に例えば「公園緑地課から紹介された」という問い合わせが入るが、残念ながら「生涯学習センターから」ではない。多くの市民に、各課の情報を上手く使って欲しいと思う。先ほど出た高齢化の問題についても、高齢者が寝たきりにならずに、明日を担う子ども達の担い手となることで、自分も生き生きし、子ども達も上手く育っていく。「地域」というのは、「地域でやってください」というのではなく、生涯学習センターが、そのコーディネーターの役割を担うことだと思う。

・「学生」とのつながりについて。学生というのは町田に住んでいるとは限らず、地方からも出てきている。また単位を取るため、ということがあると思う。その子達が一生懸命でないとは言わないが、学生を育てるといのは難しい。そうであるならば、高校生・中学生は地元なのでまだ地域に根差していけるかもしれない。大学生はあまり期待できないかなと。

会 長：このように言われているが、学生の立場からどうですか。

委 員：ゼミや教授の課題がボランティア活動などを指示される。主体的ではなく、やらされている感が強い。中には感化される学生もいるが、多くは卒業するための単位を取るため。さがまち学生活動にゼミで進められて入ってきた人は半年など、長続きしない。

会 長：長続きするのはどういう人だろうか。

委 員：主体性のある人。目標があり、そのために主体的に活用しようとか、自分自身の内面と向き合い、変わろうとする人は長続きする。仲間とのつながりや信頼関係も必要である。

委 員：その人たちが地域に帰ってからも続けてくれればいいのだが。

会 長：学生は忙しいし、アルバイトもある。学生が自発的な形で参加できるのが理想的だが、最初は先生に言われたからでも良いと思う。学生の目指す目標と生涯学習センターの活動が繋がれば良いのだろう。

委 員：市民大学も少し頑張らなくては、というのが共通認識だが、ターゲットを絞ったほうがいい。講座の作り方もそれにより変わるだろう。学生向けの講座があっても良いだろう。また、センターに足を運んだことのある人以外の一般の人にどう市民大学を知ってもらうのかも課題である。

事務局：大学連携の話でいうと、さがまちコンソーシアムの窓口である生涯学習センターが大学と市役所をつなぐというような作業をしてきた。重点事業としても、若者が主体的になって事業を行うというのをやっている。周知啓発の課題として、若い世代の方や現役世代と一緒に企画し、若者のニーズを把握したいという声があるので、庁内連絡会ではさがまち学生報告会に入ってもらい、いくつか実現したものもある。去年は地域おこしの一環として「相原の魅力発見コンテスト」を行った。ゼミや学生団体も出て、学生がいろいろな地域に入って行って活動する。よそ者・若者・馬鹿者という言葉があるが、学生さんが、よそ者や若者として参加する事で新たなものが生まれるという視点で、大学や学生団体との連携の取り組みを進めているところである。

委 員：まちチャレの選考委員をやらせて頂いた経験を踏まえて、2つの視点から回答したい。

・1つ目は生涯学習センターの位置づけ役割。これには3つあり、①地域で活動をコーディネートする人たちを育成すること、②市民への生涯学習のコンシェルジェ（道案内）の役割、③他の団体との連携をとること。まちチャレに出てわかったが、市民自らプログラムというものは考えられる。生涯学習センターが考える必要はないのかもしれない。プログラムを作るのは任せて、この3つが、役割としてあるのではないか。

・もう一つは生涯学習センターの考え方について。生涯学習センターの3つの「だけ」じゃないと題して、①高齢者「だけ」じゃない。②同世代「だけ」が集うものじゃない。③アカデミック「だけ」じゃない。①については、生涯学習センターというと、高齢者だけが集うイメージが非常に強いので、これを払拭しないといけない。②の同世代だけが集う、というのでは、つながりが広がらない。ソフトダーツというのがあったが、親と子どもだけというのを考えたが、いろんな世代にしないと広がりが無い。③のアカデミックな、政治的な学習もいいが、学習というものを幅広く考えた場合、ごみ問題でも野菜作りでもガーデニングでもいいと思う。市民が能動的に考え、課題を解決出来るようにならないといけないと感じる。

会 長：位置づけの3つの役割は、皆さんが大体共通して示しているところであり、2016年の答申に沿っている部分がある。そこで、よく出来た答申だと思われたのだと思う。

辰巳委員もご意見も、概ね答申に沿う方向だと思われる。

会 長：最後になるが、私から。

・生涯学習センターは5年前に発足した。従来の公民館と市民大学、さがまちコンソーシアムの3つの事業を統合することで、生涯学習・社会教育の公的な教育機関の拠点として発足した。すぐに教育プランが定められたが、これは、従来の教育プランとはそれまでと違っていた。2014年の3月に定められたものだが、「教育委員会は子ども達が知性と感性を育み、心身共に健康で、人間性豊かに成長し、互いの人格を尊重するとともに、社会の一員としての自覚をもって地域にかかわる人間に育つことを目指します。」この部分はいわば学校教育の部分だが、後半が「また、誰もが生涯を通じあらゆる場で学び、支え合うことのできる社会の実現を目指します。」とあ

る。これはまさに生涯学習センターの目指すべき姿として提示されていると私は理解した。更に、2016年3月の審議会の答申で言われているのは6つの点①「生涯学習」のイメージチェンジ②地域課題の解決を進めるための土台づくり③地域と人材をつなぐ仕組みの構築④生涯学習センターに関わる団体等との連携推進⑤地域と学校をつなぐ生涯学習のさらなる推進⑥公共施設の役割の再検討で、このとおりではあるが、これまでの5年間の生涯学習センターを振り返ると、地域の教育力に資するような事業が足りなかったと思うので、この部分を事業として改めてすべきだと考えた。地域の教育力向上で実施する事業とは、地域の課題を解決する学習、地域の人材を活かすようなもの、地域の組織をつなぐものというようなことがあって、それぞれの内容的には資料の下の左側にあるように、「地域づくり」には、健康づくりや地域の福祉、環境保全、防災等について一緒に考えていく事業が、「地域の人材を活かす」にはボランティアの育成や子育て世代と若者の支援が、「地域連携」では、小・中学校の支援、NPOや大学、シルバー人材センター、市民協働推進課や社協との連携も含めて期待されている。

・2017年度の生涯学習センターの仕事目標というのがあったが、まさにこれらを考えている。1番目の優先事項として、庁内連携体制の強化、2つ目に市民大学の検証と再構築、3つ目が地域づくり型生涯学習の研究、4つ目にさがまちコンソーシアムの活用5つ目がことぶき大学の運営の最適化の研究とあり、これらは目指したい姿の一つのステップなので、これをより具体的に目標として設定していけばいいと思う。

以上、各委員から意見をいただいたところであるが、これをまとめて「見える化」して提示し、その中で機能について具体的に何が出来るかどうかを議論したい。次回の7月に発表していただきたい。

## 2. 報告事項

### ① センター長報告

センター長：事業評価に関しては、お配りした資料をご確認ください。

### ② 町田市生涯学習審議会の議論について

センター長：5月15日開催の第7回の生涯学習審議会に出席したのでその報告をいたしたい。生涯学習審議会は、市長からの諮問に対し、答申書をまとめることになっているが、今年度で2年目の審議に入る。第7回では、生涯学習行政が担う役割について検討する中で、様々な立場から、様々なご意見が出されたので紹介したい。

<意見の一例>

- ・ 税収が減り、人口が減る中、高齢者が増えるということは一方で、成熟社会となったことを意味するという明るい視点で捉えたい。
- ・ 民間の活力を利用する。
- ・ 予算が厳しいとは言え、社会教育のための場の提供や一定の補助金は必要である。
- ・ 過労死ラインを超えるような教師の現状がある中、学社連携が学校主導では難しい。
- ・ 地域の文化や歴史を後世に伝えるために、施設や分野の枠を超えた横断的視点が必要である。
- ・ 民間等との住み分けが必要。

### ③ 東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：都公連からの報告について。委員部会の研修会を今年も2回開催する。1回目は9月（講師の都合で詳細は未定）。2回目は都公連の研究大会で2月3日（土）に行う。

## 3. その他

○平成29年度東京都家庭教育支援基盤形成事業実施要綱及び補助金の申請調査票（当日資料）

事務局：要綱の4番にある通り、補助金の申請の要件として運営委員会を設置することになっており、町田市では例年この生涯学習センター運営協議会に担っていただいている。資料の通り講座を実施し、今年度から親と子の参加型の事業も補助金の対象となった。補助金の対象になるこれら事業の申請に対する承認を頂きたい。これまでは毎回の各事業の事業評価をもって替えさせていただいていたが、今年度から中間の事業評価と最終事業報告をもって運営委員会の検討とさせて頂



きたい。

会 長：では、今回のこの報告をもって承認といたしたい。  
次回は7月21日（金）でよろしく願いいたします。